

JACTFL 第 10 回記念シンポジウム「外国語教育の未来を拓く」

分科会報告:

「複数言語教育の取り組み～持続可能な人財育成をめざして～」

分科会報告 2: 多言語・複言語教育についての実践報告

分科会 2 では、多言語・複言語教育について、4 本の発表が行われた。各発表者にお寄せいただいた原稿をまとめて報告する。

1. 「資質・能力の育成を目指した授業作り—都立青梅総合高等学校「ハンゲル」3 年間の事例—」

発表者: 石黒 みのり(東京都立青梅総合高等学校)

都立青梅総合高等学校は、2019 年度から文部科学省委託事業である「グローバル化に対応した外国語教育拠点事業」の研究拠点校となり、発表者の担当する「ハンゲル」(韓国語: 初級、自由選択科目)はこれまでの 3 年間(2020 年度は慶應義塾大学外国語教育研究センターが事業を引き継ぎ、2021 年度は文部科学省委託事業「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(グローバル化に対応した外国語教育推進事業)」としてプロジェクトを継続中)、新学習指導要領が掲げる「資質・能力」の育成を中心とした、パフォーマンス評価を取り入れた授業づくりについて研究してきた。本発表ではその 3 年間の授業事例について報告する。

1 年目(2019 年度)は「青梅総合高校高等学校の校内を韓国語で案内できるようになる」という課題を設定し、研究授業を実施した。2 年目(2020 年度)は「青梅総合高等学校を紹介しよう」と題し、動画(オンデマンド)で自分が通っている学校を、グループで 5 分以内で韓国語で紹介する課題を設け、授業を実施した。そして 3 年目(2021 年度)は「青梅総合高等学校をオンデマンドで紹介しよう」という課題を設定し実施する予定だったが、コロナ禍による日程変更の影響により実施できず、急遽「皆に好きなことを自由に質問してみよう」という内容に変更した。これまで実際の場면을想定しオーセンシティのあるパフォーマンス課題を設定して取り組んできたが、今後はこの課題をルーブリックを用いてどのように評価していくかを検討しながら、授業実践に取り組みたい。

質疑応答:

活動前後の生徒たちの意識の変化(モチベーションやキャリア)はどうか。

—「1人でやると難しいが、グループでやることにより目標を達成できた」との声があった。キャリアにどう繋がっているのかは現時点では分からない。

グループ間の協同学習の成果はどのようなものか。

—生徒から「質問をグループで協力して考えることができた」「今後実際に使える表現を覚えることができた」との声から、「聞く」力及び「話す(やり取り)」力は以前よりも丁寧にできたのではないかと考える。

2. 「日中韓 5 大学連携による絵本読み聞かせプロジェクトのデザインと教師間の協働」

発表者：澤邊 裕子(宮城学院女子大学)

中川 正臣(城西国際大学)

植村 麻紀子(神田外語大学)

青森 剛(世明大学)

劉 星(北京理工大学珠海学院)

寺尾 美登里(立命館大学)

「絵本プロジェクト」とは、2021 年度、日中韓の 5 大学の学生がつながり、絵本を翻訳(日本語学習者にもわかりやすく日本語を簡略化した「やさしい日本語」も含む)、国内外の外国につながるのある子どもたちを対象として多言語によるオンライン読み聞かせ会を企画し、実施したプロジェクトのことである。参加者の複言語・複文化を豊かに育み、多文化共生の社会づくりに貢献することを目的として実施された。2021 年 4 月から絵本選択などの準備を始め、10 月までに翻訳を終了、5 大学の学生が 8 つのグループに分かれてそれぞれ読み聞かせ会の日時を決め、「読み聞かせ WEEK」のような形態で 2021 年 11 月 26 日から 12 月 19 日まで全 7 回シリーズで、絵本読み聞かせ会を開催した。会には日本、韓国、中国、ベトナムから延べ 66 名の外国につながる子どもなど(2 歳～13 歳)が参加した。参加者(子ども)に対して行った事後アンケート結果からは非常に満足度の高い読み聞かせ会となったことがわかった。2021 年 12 月と 2022 年 2 月にこのプロジェクトにおける教師の役割について、教師によるオンライン振り返り会を行い、オンラインツールの Padlet を用いて意見を出

し合い、KJ 法を用いてカテゴリー化をした結果、「趣旨・意義の説明」「読み聞かせ会に関する事前指導」「進捗状況の確認と共有」「グループワークのサポート」「学外の人、モノ、コトとの連携」「学生との振り返り」という教師の役割があったことが明らかとなった。

分科会において本発表に参加してくださった方からは、プロジェクトを実践する際、教師にはいかなる理念があったのか、翻訳や読み聞かせをする絵本はどのような基準で選定したのかという質問が寄せられた。これに対し、理念に関しては可能な限り多くの子どもたちに、様々な絵本を様々な言語で届けたいという思いがあったこと、絵本に関しては本プロジェクトで使用するということについて出版社と著者から承諾を得られることを前提とし、複数の中から絵本を選べる場合は学生たちが子どもたちに届けたいと思うものを選定基準にしたと答えた。また、同じような取り組みをしたい場合、何から始めればよいか、気をつけるべきことは何か、などの追加質問が終了後にあったが、これに対しては、初めから均等に仕事を振り分けずリーダー中心に核となるメンバーが土台を作ったこと、絵本を翻訳する前に著作権、翻訳権、公衆送信権などをクリアできるかの確認が必要であると答えた。

3. 「オンライン授業を受講した中級日本語学習者の意味づけと対処行動－KJ 法による分析－」

発表者：稲田 栄一（立命館アジア太平洋大学）

吉田 真宏（立命館アジア太平洋大学）

本発表は、立命館アジア太平洋大学のオンライン日本語コースを受講した学習者の意識調査の結果報告である。2020 年春学期に発表者が担当した中級日本語科目の学期終了時に、受講生が経験したオンライン授業に関する出来事や意見を具体的に書いてもらった。この振り返りレポートの記述を KJ 法によりまとめ、オンライン学習が受講生に与えた影響と受講生の対処行動を分析した。

オンライン化に伴う環境変化を柔軟に受け入れた受講生は、自身の学習がコントロールできるようになったというプラスの意味づけをしていた。これらの受講生は、以前より学習時間を増やし、学習内容も管理できるようになったという。一方で、オンライン化に伴う困難に関する記述では、日本語の授業や学習における困難だけでなく、他者との交流機会の喪失といった生活全般に関わるものもあった。こうした様々な困難

が重なり、モチベーションを下げたという受講生が多く見られた。また、日本語能力に関しては、会話・漢字・読解能力等が低下したという意見が目立ち、授業改善に向けて取り組むべき課題が見えてきた。今後、教員に求められることとして、学習環境の整備、学生との対話を増やす、学内外のイベントへの参加奨励などが挙げられる。

質疑応答：

オンラインの方が対面授業よりも会話練習ができると答えた学生がいたのは何故か。

一対面授業では周囲が気になり集中できなかつたが、オンライン授業ではZoomのブレイクアウトルーム機能により静かな環境で会話練習に集中できると考えていた学生は、このような感想を持つことになったようだ。

オンライン授業ならではの利点や欠点があれば教えてほしい。

一対面との大きな違いは、人間関係構築の難しさと学習者の細かな様子が見えないことであった。今後はチュートリアル等の時間を設けて個別の対応を増やしたい。

分析した結果を学生と共有し、リフレクション等に活用することはあるか。

一今のところないが、今後、学生の振り返り活動等での活用を検討していきたい。

4. 「モジュール型オンライン教科書の開発－1年生向けドイツ語授業における試み－」

発表者：コンスタンティネスク チェザル(明治学院大学)

一般の教科書に頼って授業を進めることは教員にとって便利だが、同時に学習の目標、内容、ペースを選択・調整する自由が失われる。ペースを調整することによって受講者の期待を損なうことなく、各クラスの特徴に配慮した授業運営が可能になる。内容を自由に選択することができれば、教員は学生の自己学習に役立つ参考資料を紹介し、授業に取り入れることも可能になる。教養教育における言語教育は言語習得にとどまらず、コミュニケーション能力や談話的能力に加えて、自律性やメディアリテラシーの育成も求められるようになってきている。授業の目標を自由に設定することで、教員はより効果的にそのような要求に配慮した授業を設計することが可能になる。

日本の大学における初習言語の授業は大抵の場合、春・秋学期にそれぞれ 15 コマないしは 14 コマと授業時間が限られている。このような事情のもとで、授業の内容を進行状況に柔軟に対応させ、またウェブサイトや動画などのネット上の資料を簡単に授業に取り入れることができる方法を模索した。その際、Moodle と Padlet という二つのプラットフォームを用いて、CEFR の A1 レベル相当の内容を扱うオンライン教科書の開発を試みた。更に電子ポートフォリオを利用し、学生が各自の学習記録をつけることによって、彼らが授業時間外に自由に取り組んだ学習を教員が把握することを可能にした。それと同時にオンライン教科書に各回の新しい内容を追加しクラスの進歩を教員からも学生からも確認ができるようにした。

発表では、学習内容の自己決定に焦点を当てた教育理念について扱い、オンライン教科書の一部を成果物として紹介し、参加者と共有した (tinyurl.com/mokks21)。質疑応答の際には、対面授業における上述の授業作りの応用について話題とされた。寄せられたコメントを通して使用するツールの調整や成績評価の方法を今後の課題として意識すべきであることを改めて実感した。